



コンビニ ファミレス 回転寿司

中村靖彦 (1998.12, 文藝春秋)

今まさに、食の世界は変化し続けています。著者はその状態を「混沌」と表現をしています。そして、この書で、「現代日本の食の実態を整理しておきたい」と願い、「農政を見つめてきた1人のジャーナリストによる、食の分野の観察であり分析の試み」を行っています。

現場の丁寧な取材を基本とした分析は、新鮮な驚きがあります。ざっと目次を眺めると次のとおりです。安さ、早さ、うまさ/食事作り代行します/食にこだわる人々/世界中を食べる日本/なぜコメだけは余る?/技術革新と手作りのはざままで/遺伝子組み換え食品が問いかけるもの/残飯大国・日本/いま、子どもの食は?/日本の食は砂上の楼閣。

なかでも、第9章「いま、子どもの食は?」は、大変考えさせられる内容です。

女子栄養大学のA教授は、小学校5年生を対象に、自分の食事の風景の絵を描かせています。その結果、三つの悲しい発見をします。一つは、自分ひとりだけで大人不在の食事をしている子どもが非常に多いこと、二つ目は、食卓に並んでいる料理が量的にも質的にも貧

弱なこと、三つ目は、子どもたちの多くが食事を楽しんでいない、ということです。

もう一つ、千葉県市原刑務所のY所長の話も興味深いものです。Y所長はこれまで数多くの少年鑑別所の所長を経験しています。

その間に、自分で考えた「食卓状況調査」を百人を超える少年達に行ってきました。その調査では、家庭での食事の風景について、子どもが座る場所、テレビの位置、食事を作ってくれる人や料理の内容、おふくろの味、食事の時の雰囲気、会話の様子、マナーやしつけなどについてヒアリングを行っています。そこから浮かび上がるのは、非行はいくつもの要因が重なり合っただけ起こることは分かっているものの、その中でも食卓の原風景は非常に重要な手がかりだと言えるということです。

この二つの話を重ね合わせ、著者は「子どもの身体と心にとって大事なことは、何を食べるかもさることながら、どう食べるかなのだろう。」と考えています。

前述の女子栄養大学のA教授の調査によれば、子供が食卓にひとりでも向かっている時、多くの親は家の中にいたというのです。同じ時間に家にいながら、子供と一緒に食卓を囲む気持ちが全く生まれない家族関係は、やはり淋しい。毎回一緒に食べることが重要なわけではありません。両親ともに忙しいことは子供達も知っています。忙しくても、気持ちのつながりがあるかどうか、が肝心なのでしょう。

そして、「子どもひとりだけの食卓は、早さ、簡便さを求めるあまり、共に食べることによって生まれるはずのコミュニケーションは二の次、とする大人の食そのものである。」と更に厳しく言及しています。

現代の食の世界の多様化を様々な角度からとらえる本書は、現実の取材に基づくリアルさがあり、とても興味深い書です。

(りえぞん No.18, 2001/6/4)

注：このコラムは、行政部局等と当研究所との間の連携・情報交換の手段として霞が関分室が発行している連絡誌「りえぞん」において、農林水産政策や経済学を考えるヒントとなりそうな書籍や論文の内容を「ほんのわり」だけ紹介することを目的として連載しているものです。